研究の栞

日本古建築研究の栞（第二十五回）

天沼俊一

第三十一　藁座

『建築字彙』には

扉ノ軸ヲ承ケシムル爲メ地覆ナドニ取付ケタル金物（中略）。ソレヨリシテ總テ軸請ヲ斯ク稱スルニ至レリ。昔蒲團ノコトヲ「わらざ」トイヒタリ而シテわらざハまるざナリト「東雅」ニ見エタリ仍テ考フルニ扉ノ稿座ハモト圓形ノ座ナリシナラン後世ニ至テ形ヲ變ゼシニ拘ラズ其名ヲ襲用シ居ルナランカ。次ニ匠家極祕傳ニハ鳥居ノ根包ヲ稿座トイフト記シアリ。「からど」ヲ見ヨ。

とある。さうして唐戸の圖には、木製の藁座を描き、「猫臼」・「軸請」等の別名を附してある。其上「藁座」とせずに「稿座」としてあるが、唐戸の圖の記入には「藁」の字を用ひてあるところをみると、これはどちらの字でもいゝのであらう。序ながら近畿では「軸請」だの「猫臼」だのといふ名は、つい私はきいた事がないから、餘りかういふ名稱を用ひぬのであらう。

また近畿では、軸をうける金物をいふ人と、天竺樣木鼻を背中合せにした樣な木製の軸承をいふ

人と、双方たゞ「蕊座」で片付けてゐる人と、いろ〳〵ある。だから實は其都度木のか金のかときかねば判らぬ場合もある。これでは甚だ不便であるから、こゝでは金屬製のもの例へば第一七六圖の如きのを「蕊座金物」と呼び、木製のもの例へば第一七七圖の樣なのを單に「蕊座」といふ事にきめておく。もつとうまい名を考へついたとき復改めることにする。

蕊座金物はいつ頃からあつたか、古いのは殘つてゐぬから確言はできぬが、扉が軸で回轉する以上、軸には金屬製の環を嵌め、孔にもまた同じ材料で製作した軸承を入れねば啓閉が自由でない、だから當然これはあつたのであらう。さうすると孔の上端、卽ち其周圍には何が裝飾として四葉座位をつけたであらう。尤も飛鳥時代などに於いては、そこまで進歩せぬとしても、圓形の座位あつた筈である(第一七六圖の四葉を除いた樣な形)と想像できる。さうすると理窟をやめても、其發達の順序から考へて、最初は圓形であつたと考へてもいゝ樣である。さうして奈良時代に於いては、最早圓い座位では滿足ができず、四葉か六葉をつけたのではあるまいかと思はれる。第一七六圖の四葉は當初のものと思つてもよさゝうである。これがいけないとしても、宇治鳳凰堂には當初の六葉が殘つてゐる。だから平安以降のは實例があるのである。蕊座金物の形は、他の部分例へば長押・扉定規椽等に打つてある飾金具と同じ變遷をもつてゐる。故にこれ等の金具は、上方の幣軸に打つてある懸魚の樣な形(例へば第一二三圖右方上部)のものと共に、後に飾金具について記す時まで延期し、今は木製のものについてのみ論ずる事にしておく。

＊　＊　＊　＊　＊

然らば蕊座はいつ頃からあつたかといふと、鎌倉以降であるとしてよさゝうである。第一七七圖

以下こゝに掲げたもの、及び前にだした第一三二圖より一三九圖まで、第一四一・一四八・一五六・一六一・一六二圖等にあるのは、何れも鎌倉以降のものである。

ところがこゝで考へねばならぬのは、中尊寺金色堂のである。金色堂は隨分有名で、古美術に多少趣味のある人は誰れでも知らぬものはない樣であるが、あの板扉の吊元の軸が、下は二重長押の上端に、上は幣軸からでゝゐる蕊座樣の突起に入つてゐることは、殆んで誰れも氣をつけぬ樣である（第一七五、一七六圖）。普通扉の軸は、幣軸が上方を廻つてゐる場合には、其下端の平たい部分にあけてある孔に入つてゐるのであるが（第一二二、一二三圖）、此堂の夫れは下端に入つてゐないのは、あゝしなければ納りがつかぬためであるのは勿論である。故にあの突起は自然に發達したもので、かういふところへ落つくのは當然である。此れが恰もくりぬき墓股の內部の彫刻が進化した如く、次の鎌倉時代に入つてから、木鼻の背中合せの樣なものになつたと見てもいゝと思ふ。

扨てさうなると、鎌倉以降の蕊座は、外國輸入とみる方がいゝか、或は上記の突起が自然に進化したとみる方がいゝか、いづれ事實は一つほかない筈だが、此際はどつちとも考へられる、想像はどうでもなる。但し幣軸からの突起は、特別の場合であるらしく、どうも金色堂以外に遺物卽ち實例がない樣である、果して然らば唯一例では多少物足らぬといふ感がなくもないけれども、とにかくこれは原始蕊座といへぬことはあるまい、さうしてこれから充分に發達し得るものである事も亦見逃すことはできぬと思ふ。

鎌倉以降、蕊座がある樣になつてからは、從來柱間に割合に背の低い出入口を設ける時などには特に其間に丈け長押を入れて夫れに扉を吊込んだ

のであつたが、左樣な大袈裟な設備をせずとも、貫の横腹へたゞ夫れを打付けさへすれば事足りるから、至極便利になつたのである。一例をあぐれば法隆寺上御堂に於いては、正面の扉は全部棧唐戸であるが、軸は何れも長押下端に入れてあるのに、側面の低いのは、上方丈け藁座を用ひてあるから、簡單におさまりがつけられると同時に、變化をつけて目先をかへることも出來る。藁座は木鼻の彫刻と同じ樣に、如何なる樣式の建築に用ひても調和がとれ、其上甚だ便利であるから益々流行したのであらう、さうして遂に夫れに特別の意匠を凝す樣になつたものと思はれる。

最初の藁座は天竺樣木鼻を背中合せにした樣な型、卽ち最も有觸れた型であつたらしい、といふのは東大寺南大門に其型のが用ひてあるからである。併しながら同時にまた淨土寺淨土堂(播磨)や上醍醐經藏に用ひられてゐる樣なものもある。以上

天竺樣建築の場合であるが、唐樣建築には南大門式のばかりといつてもいゝ位であり、和樣建築に於いても亦さうである。してみると淨土堂や經藏のが寧ろ特殊の場合で、普通は南大門式のとしてよからう、さうして其形によりて天竺樣とか唐樣とかいふ名はつけられぬので、場合によりて適當に用ひられたものと思はれる。

更に最も異例とすべきは、長崎市所在の黃檗宗の寺のであつて、瓜の樣な形のものや、魚のうき袋の樣なのや、全く他に見ない變つた種類のを用ひてある。左に先づ分類を試み、次に數種の實例に就て記載をする。

(一)　原始型。中尊寺金色堂。

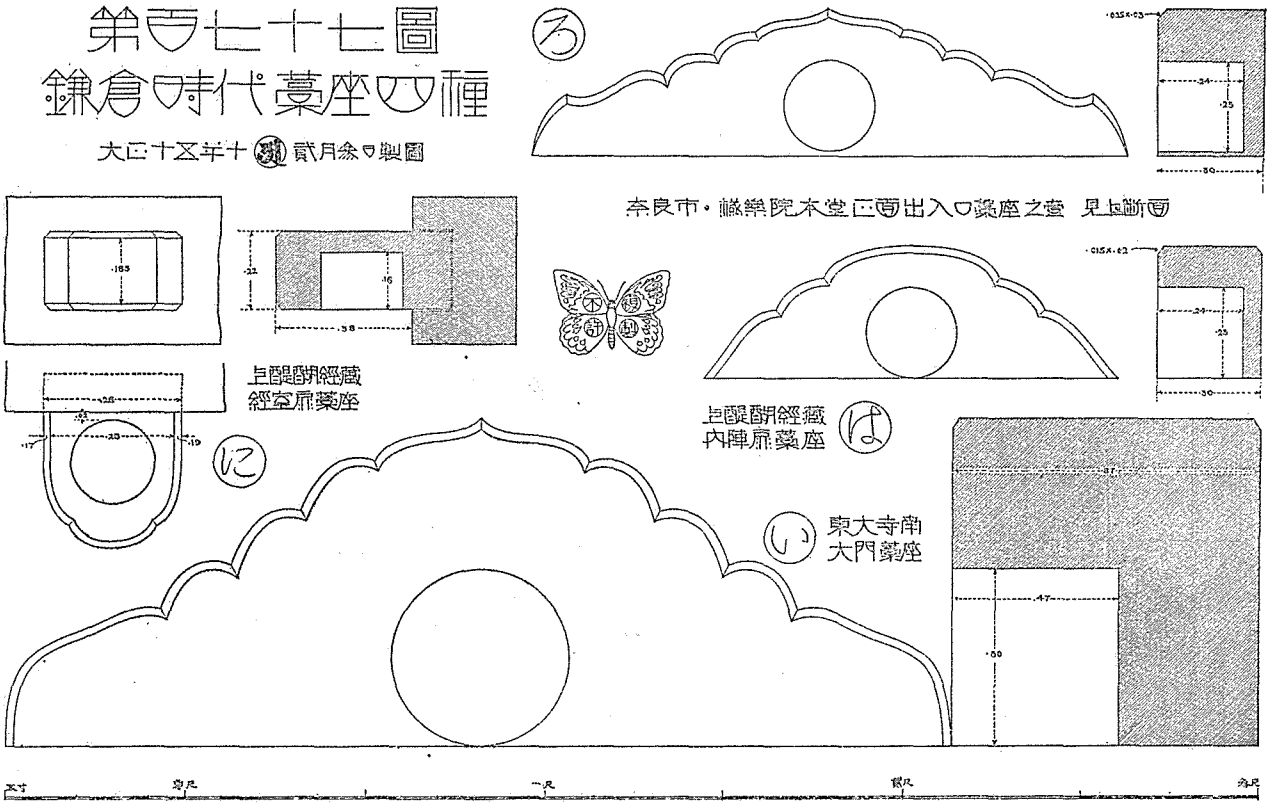
(二)　木鼻型。

長。最も普通のもの、實例多し。

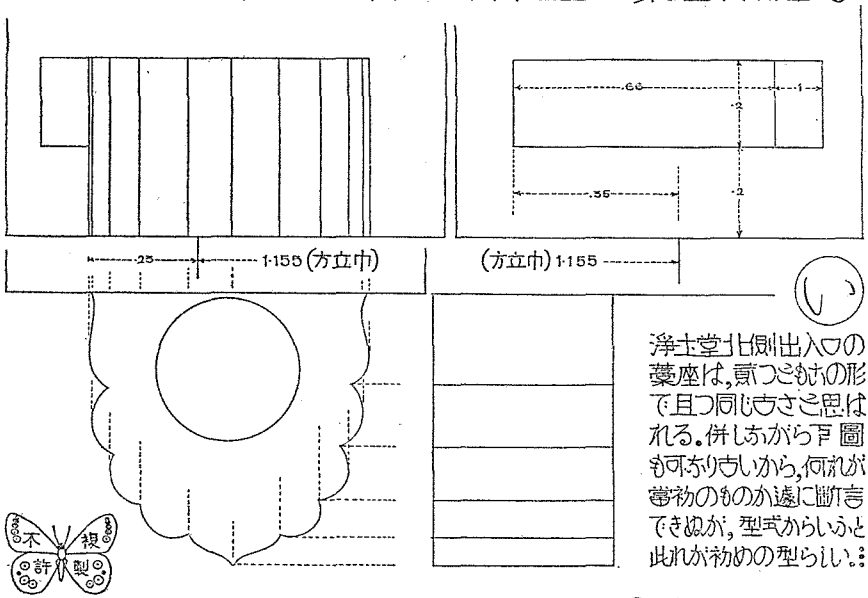
短。主として天竺樣に用ひられた樣

第百七十七圖
鎌倉時代藁座四種

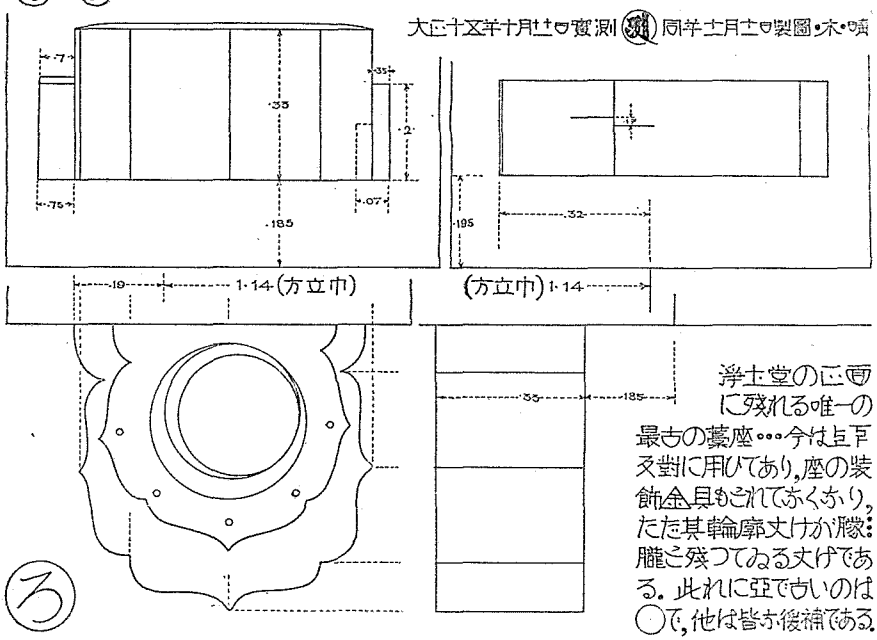
大正十五年十一月廿二日製圖



第百七十六圖　浄土寺浄土堂蓮座貳種

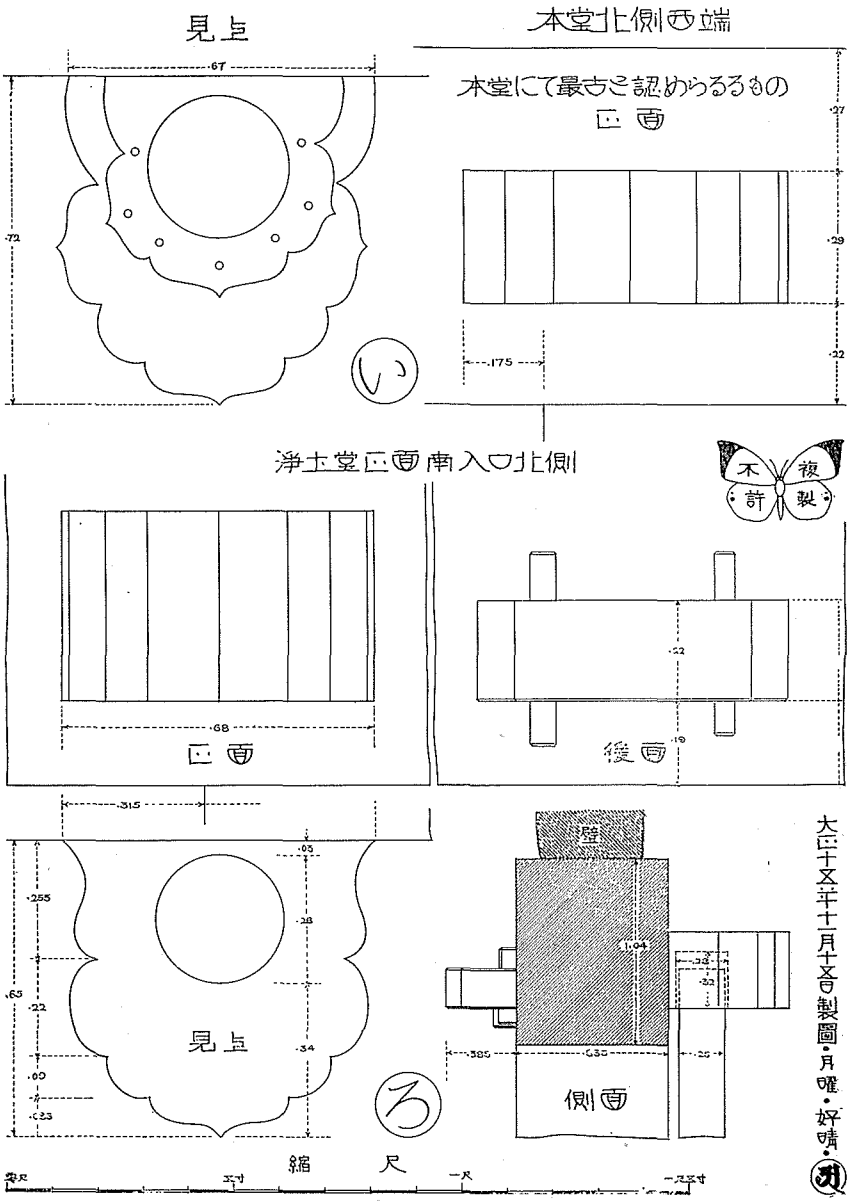


浄土堂北側出入口の蓮座は，貳つともおの形で且つ同じ古さと思はれる。併しながら下圖も可なり古いから，何れが最初のものか遽に斷言できぬが，型式からいうと此れが初めの型らしい。

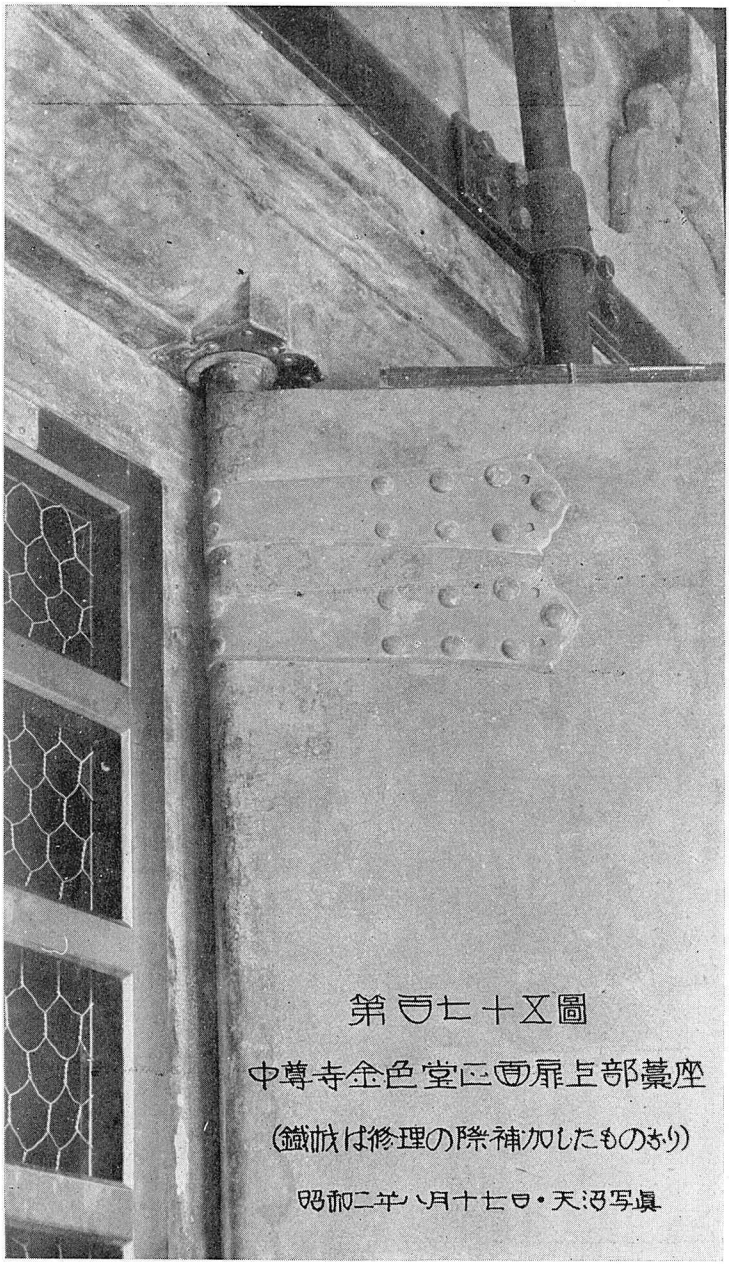


浄土堂の正面に殘れる唯一の最古の蓮座…今は上下反對に用ひてあり，座の裝飾金具もこれてふくかり，たた其輪廓丈けが朦朧と殘つてゐる丈けである。此れに亞で古いのは〇で，他は皆ふ後補である。

第百七十九圖　浄土寺浄土堂及本堂藁座



不許複製

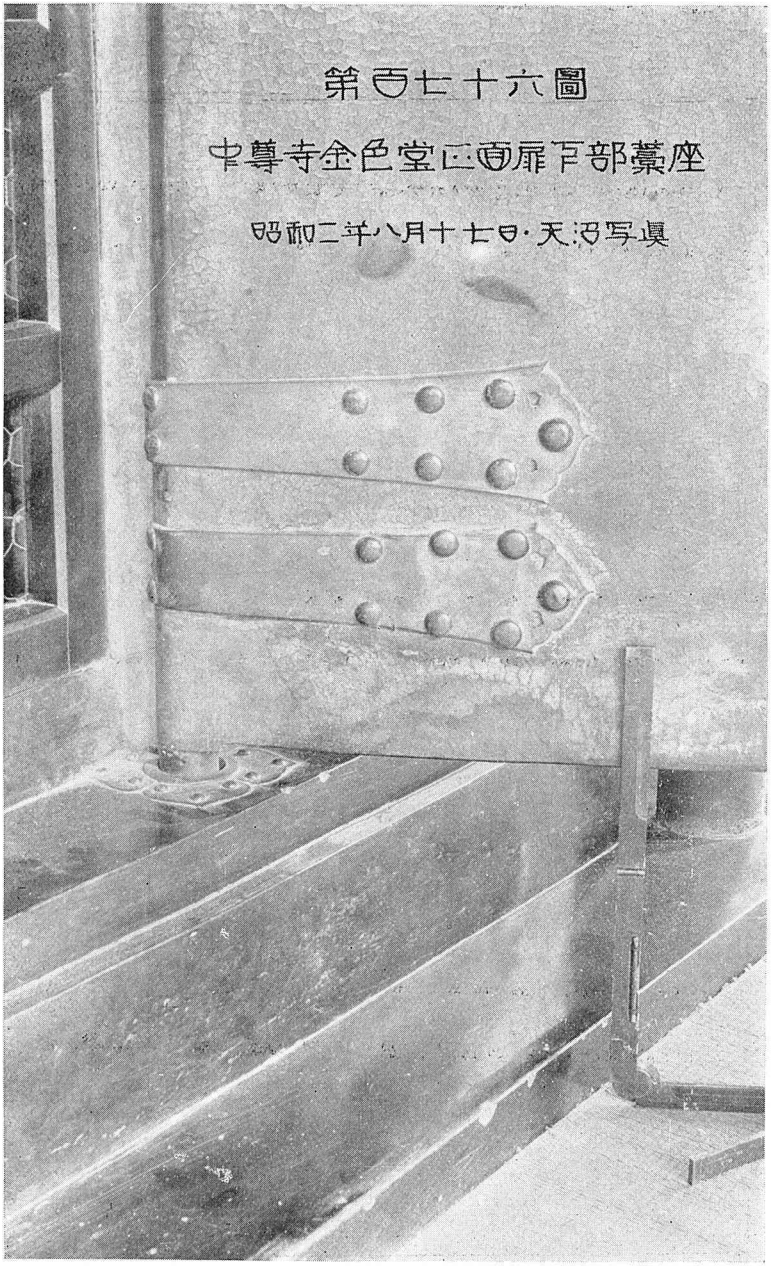


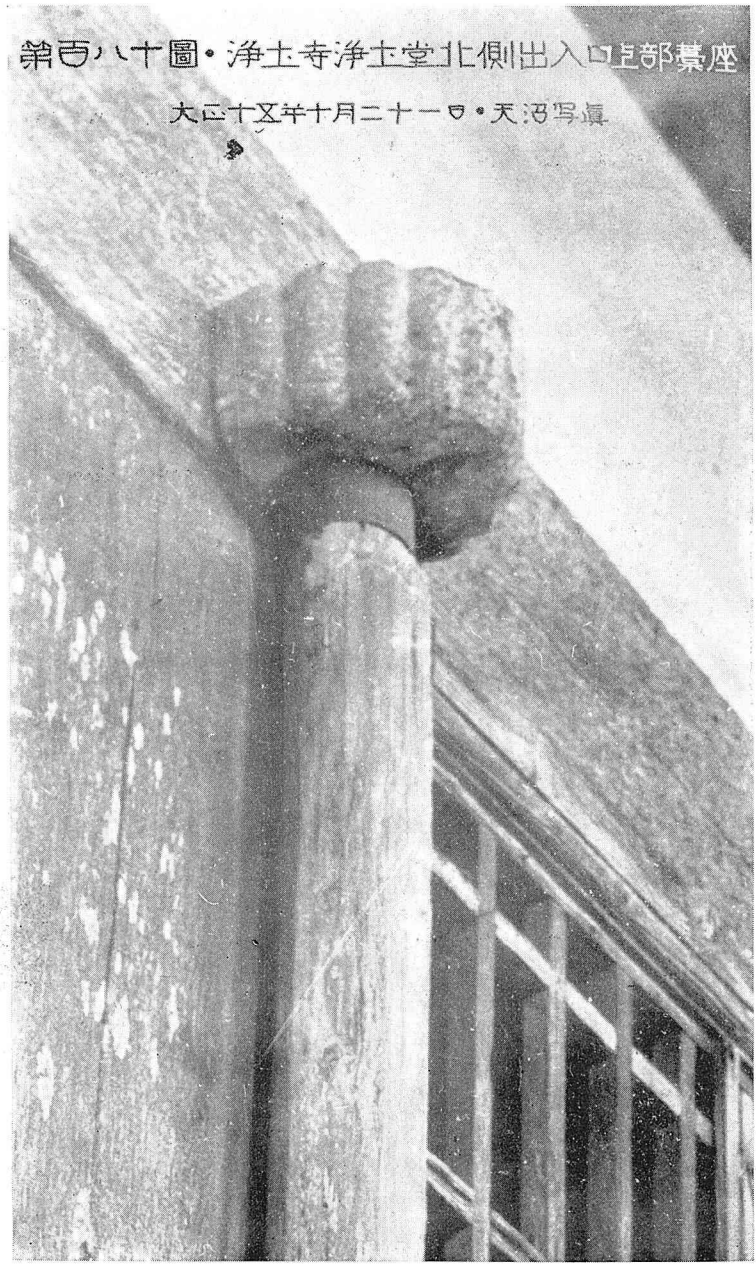
第百七十五圖

中尊寺金色堂正面扉上部蟇座

（鐵帽は修理の際補加したものあり）

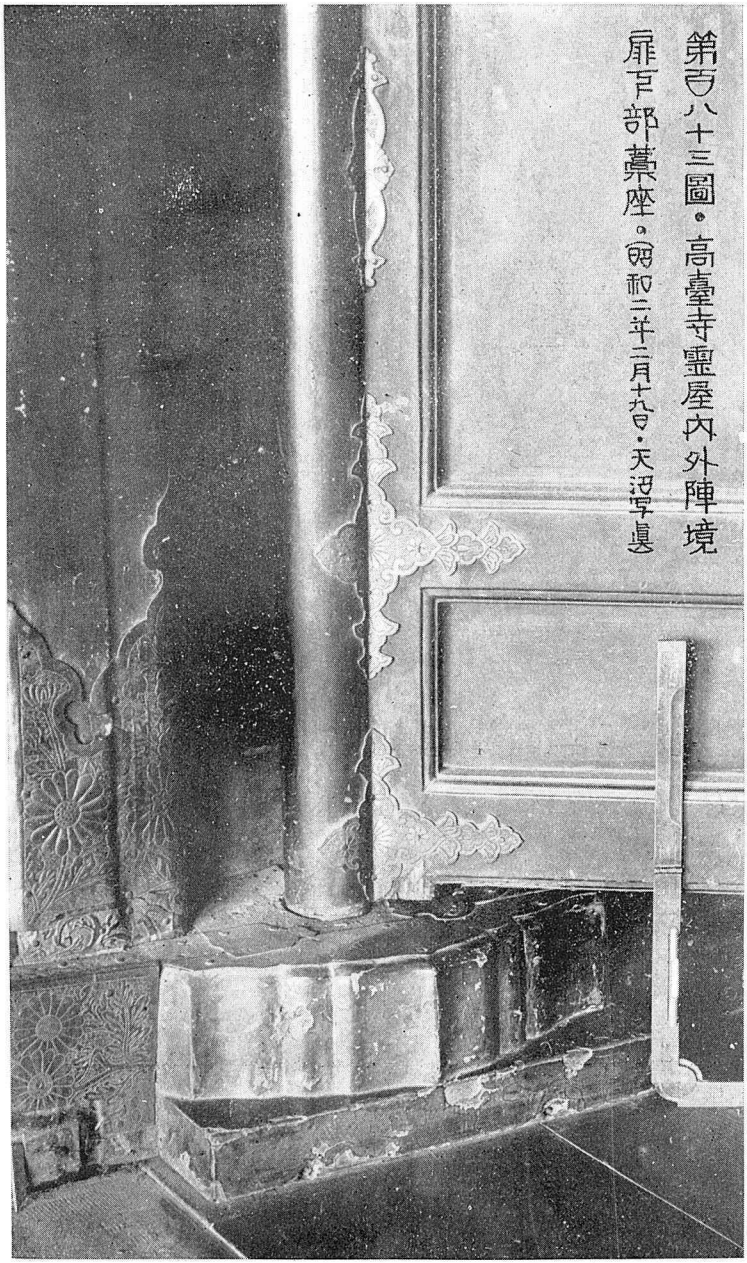
昭和二年八月十七日・天沼写眞


第百七十六圖
中尊寺金色堂正面扉下部藁座
昭和二年八月十七日・天沼写眞

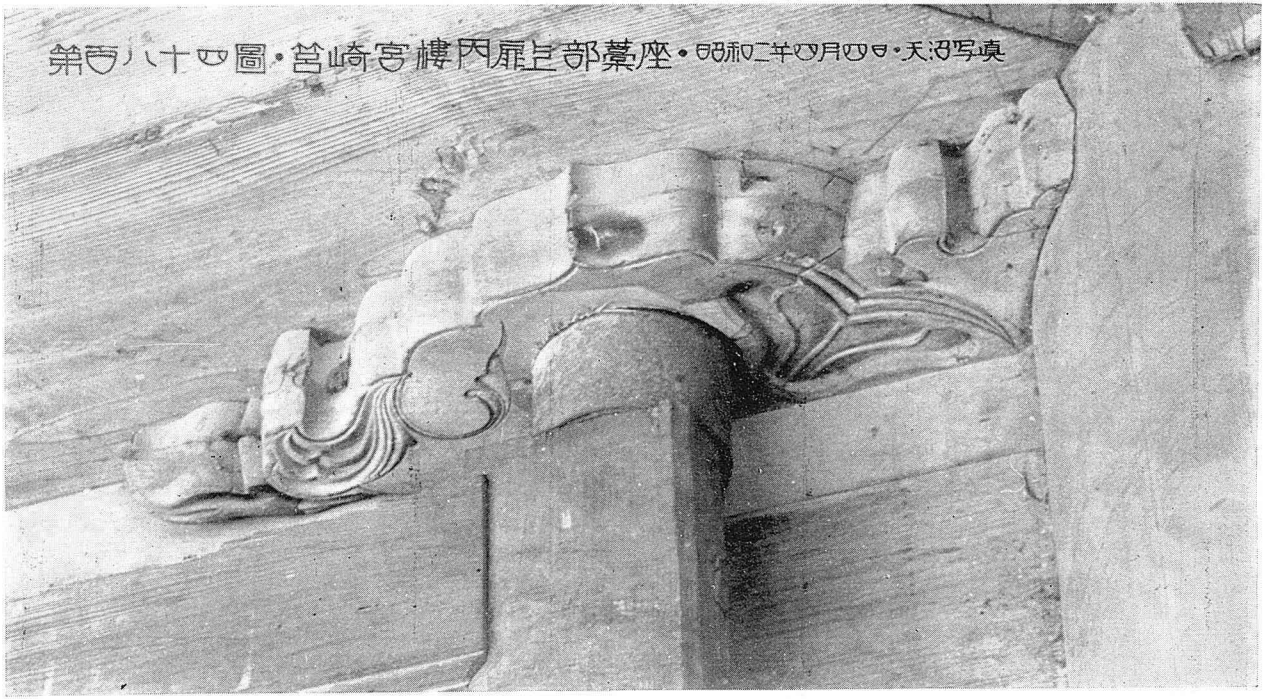

第百八十圖・浄土寺浄土堂北側出入口部蟇座
大正十五年十月二十一日・天沼写眞

第四十六圖・法隆寺金堂三重目の大斗とその上部構造
大斗は長さ十五寸巾十二寸の一木・天沿寸眞

第百八十二圖　同寺本堂内陣外陣境上部
明治二十二年十月十日・天沼写眞

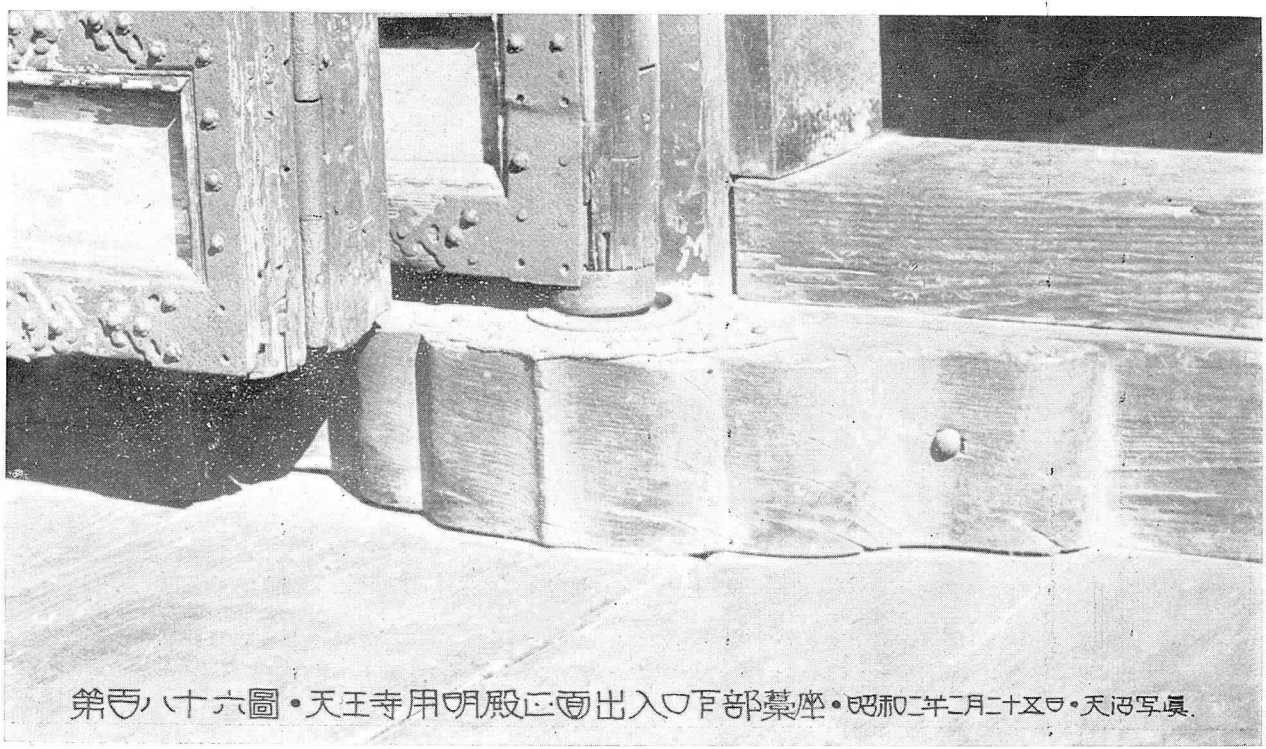


第百八十三圖・高臺寺靈屋內外陣境
扉下部藁座・(明和三年二月十九日・天沼享邊)

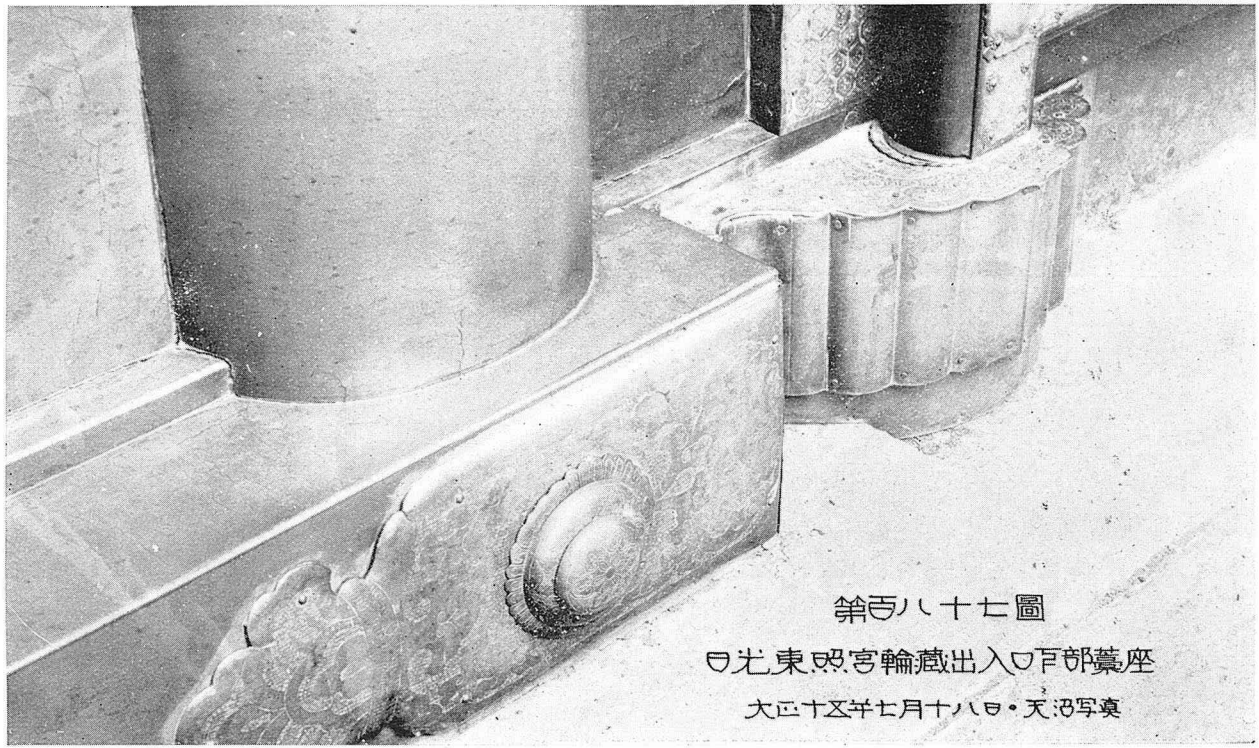


第百八十九圖・宮崎宮樓門扉上部蟇座・昭和二年七月廿四日・天沼写真

第百八十五圖・宮崎縣・木造中央部中扉内欄間・昭和二年四月四日・天沼寫



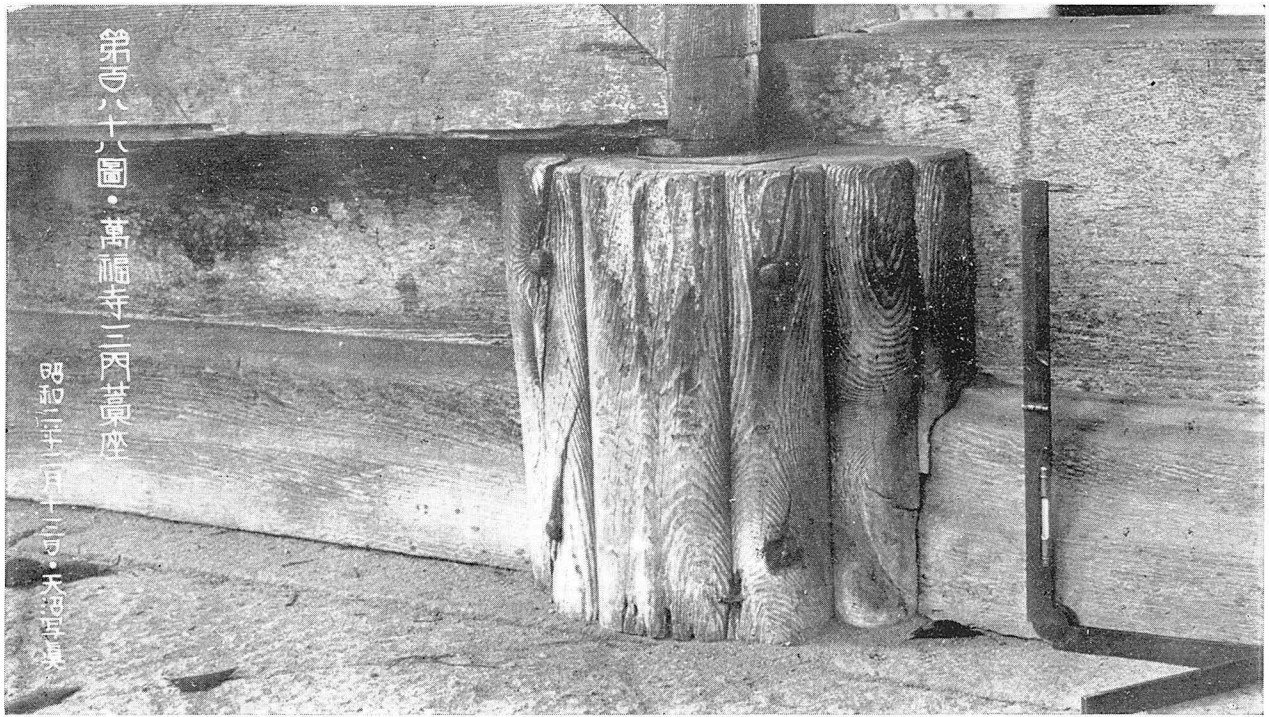
第百八十六圖・天王寺用明殿正面出入口下部藁座・昭和二年二月二十五日・天沼写眞



第百八十七圖

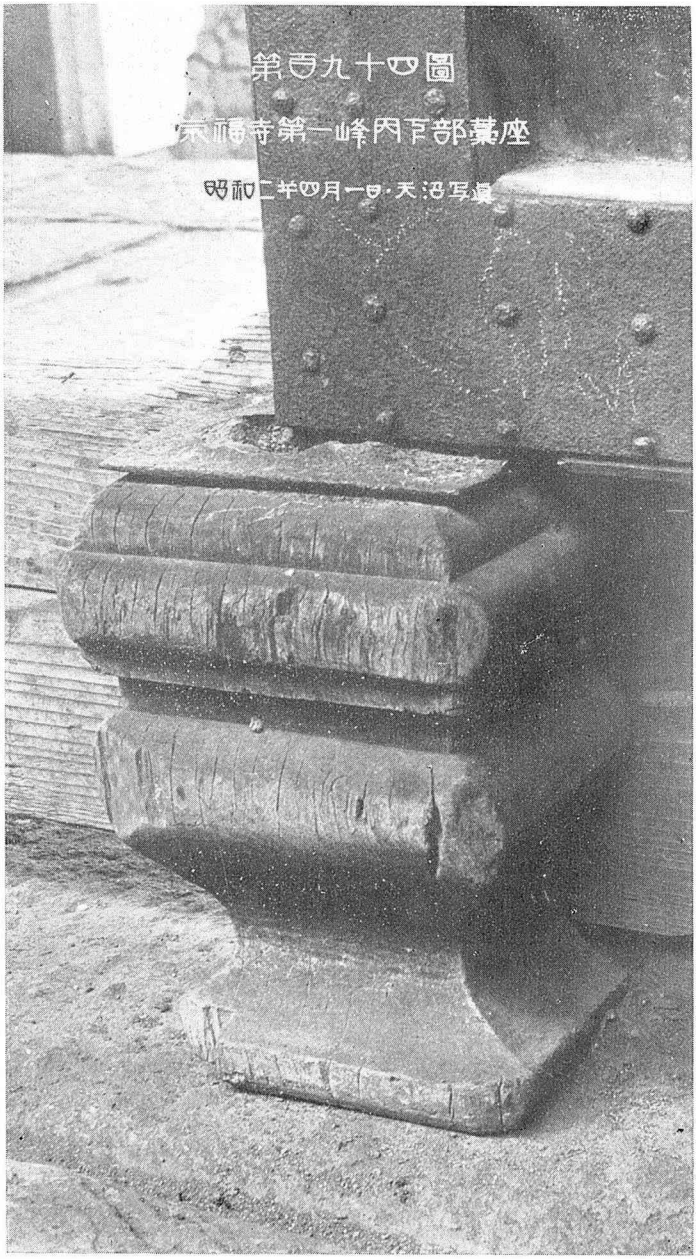
座藁部百口入出藏輪宮照東光日

真寫沼天・日八十月七年五十四大



第四十六圖・萬福寺三門蓮座

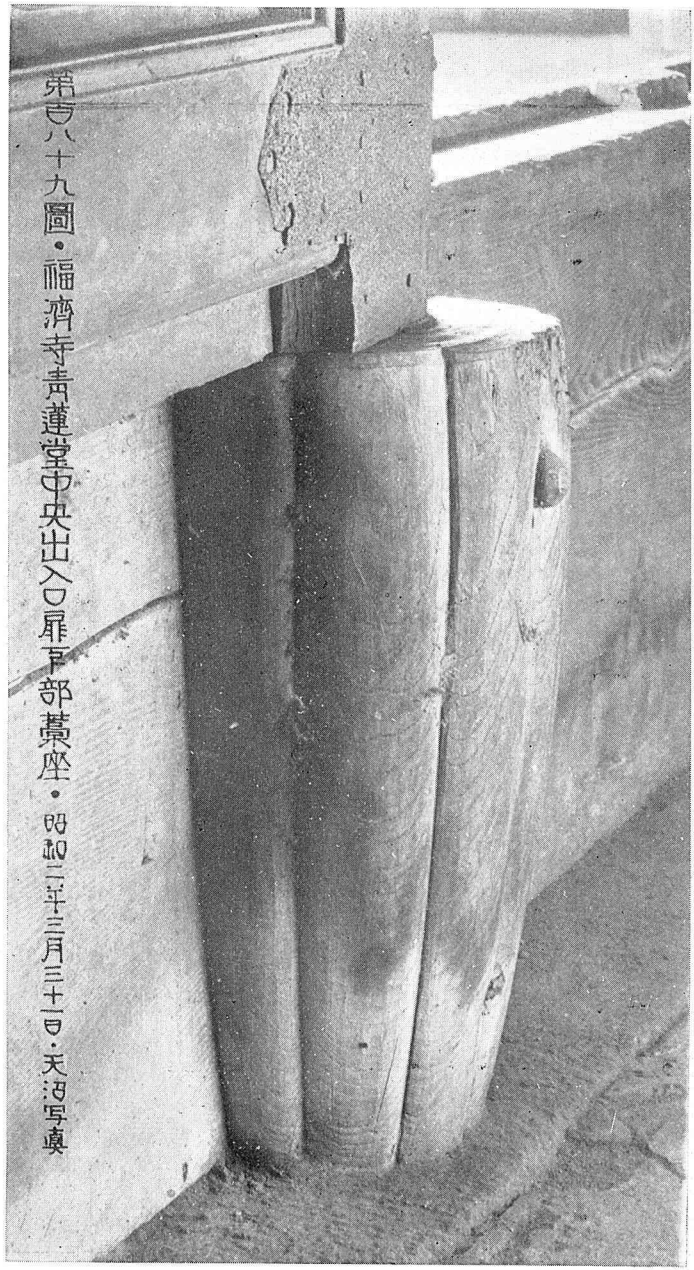
昭和十年十月十日・大西清撮影



第百九十四圖

興福寺第一峰内亨部基座

昭和二年四月一日・天沼写眞



第百八十九圖・福濟寺青蓮堂中央出入口扉戸部蕨座・昭和二年三月三十一日・天沼写真

第百九十圖・福濟寺大雄寶殿正面出入口扉戸部蕨座・昭和二年三月三十日・天沼写眞

第百九十一圖・福濟寺天王殿半扉上部藁座・昭和二年三月三十一日・天沼寫眞

第百九十貳圖・福濟寺大師殿手扉下部蕨座・昭和二年三月三十日・大沼寫真

第百九十參圖
福濟寺大雄寶殿出入口上部蓁座
昭和二年三月三十一日・天沼写眞

第九十六図　羅城門の柱の表面に見られる鋸目

である。淨土寺淨土堂及本堂。

（三）　瓜　型。福濟寺青蓮堂・同大雄寶殿。

（四）　氣胞型。同天王殿・同大雄寶殿。

（五）　異　型。崇福寺第一峰門。

（六）　歪　型。瑞龍寺（鐵眼寺）大雄寶殿。

大概この位と思ふ。新しいのがあつたらば後に補加することにする。殆んどすべてのは（一）に屬してゐる、（三）以下は全く特殊のものである。

＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉時代

前から述べてきた通り、現在最古のものは鎌倉のである。さうして先づ當代より始まつたとすると、初期のでは先づ東大寺南大門のであらうが、これは第一七七圖㋑の樣に、天竺樣木鼻の背中合せである。この門は正治元年の再建だから時代は確かである。さうしてこの樣な藁座は上の方につけてある丈けで、下方にはないのみならず、下方には初めから何の設備もしてなかつたらしい。さう考へるとこの門は、他にいくらも例がある通りに、扉までは手が廻らなかつたのかも知れぬ。餘計なことだが序にかいておく。

同圖㋺亦これと同じ型である。あれはあの通り和樣の建物で、同じく初期のものと思はれる。南大門のは隨分力が入つて居り、如何にもあの建物に相應しいが、この方は幾分線に締りがなくなつてゐる。

此の種類のでは、この他に第一三二㋺・第一三七・第一三九圖（第十二卷第一號）等にでゝゐるから、夫れ等をみると一層よく判る筈である。

㋩は醍醐寺經藏內陣扉ので、前二者に似てゐるが、中央のところが尖つてゐない丈けのことである。だからこれ等は同じとみても大して不都合ではない。

㋥は古い錫杖彫（第三十七圖參照）の樣で、恰もみたとこ

ろは三葉繰形に似てゐるが、この圖版に示した四種のうちでは、これが最も天竺樣に適した形である。先の三つは大釘で打ちつけるのであるが、これはさうはいかぬ。釘の代りに貫をほり込んで中にうめてある。これは上方のであるが、下方のも亦これと同形をしてゐる。

第一七八・第一七九の二圖には播磨の淨土寺本堂及び淨土堂の夫れを四種のせておいたが、これ等は何れも特別の形をもつてゐる。幅がないためにこれ等も亦釘付にできず、且つ扉は相當の重量と大さとをもつてゐるから、少しばかり貫へ挿込んだ位では直に拔け出す虞がある。だから後ろの方に枘をつくり、貫の裏まで出して上から栓をさしてとめてある。

惜しいことには古いのがない。最古と思はるゝのでも鎌倉までもつて行けるかどうか判らぬが、其内のあるものは、ことによつたら古いかも知れぬから、夫れをこゝに說明をしておく。

第一七八圖(い)及び第一八〇圖は播磨淨土寺北側出入口上部の蓁座の圖面及び寫眞である。かうなると、まるで花頭拱の樣な輪廓をもつてゐて、恰好は中々よろしい、且つまた形は天竺樣に適してゐる樣に思ふ。この手のは、この出入口の兩方に一つづゝ殘つてゐる丈けである。同じく北側南端の小さな出入口には、南大門式普通型のがつけてある。これも初めのものかどうか判らぬが、さうしても差支はないのである。

要するに當代のは

天竺樣木鼻を背中合せにした樣な型のが最も普通で、これは建築の樣式に關係せずに用ひられた。三葉型や花頭型のは主として天竺樣建築に用ひた樣であり、從て實例は多くない。

とみてよさゝうである。

室町時代

藥座も亦、時代が室町になつたからとて、前代と代りがない、もつと降つても殆んど同じ事である。第十二卷第一號にのせた第一三四圖には、京都東福寺三門上層扉上下の夫れを大きくかいておいた（同圖ま・ふ・こ・に）が、其形は上醍醐寺經藏の型である。序に扉の止木――名はよく知らぬが、其召合せのところに打つてある木で、兩方の扉を閉ぢたとき、其まゝはづすことができぬ樣にしたものであるから、とめぎといつておいた――は、簡單な形であるが、注意しておく必要がある。

同第一三五圖の上下にあるのは、上の方の分丈けはたしかに古いとみていゝが、下のは後補であつたと記憶してゐる、だから圖でみても下の方は大していゝ形でない。とにかく上下とも何故か扉に比べて大變に大きく、扉との調和がよくとれてゐない。

同第一四一圖のは、上下に同じ樣な形のがついてゐるが、今迄掲げた例より幾分賑かである。この種のは今後永く用ひられたので、今日にまで及んでゐる。

第一七八（ロを除く）一七九及一八一圖に示したのは時代が何れも室町以降で、どうも判然ときめられない樣である。併しながら、もとは鎌倉初期の型があつたので、夫れを後に修補するときまねしたものと考へるのが一番穩當であらう。珍らしい型だから、寫眞にも圖にも示しておいたが、これ等はどれも皆鎌倉式のものとみて、こゝには論ぜぬことにした。故に室町のは次の樣にいふことができるであらう。

鎌倉時代の繼承で、殆んど全部が普通の型であるが、たゞ兩端に少しく手を入れて美的ならしめたのがある位である。

然るに次の

桃山時代

になると、大體は同じであるが、注意すべき事項が三つばかりできてきた、卽ち

（一）側面又は上下面に飾金具を打つた

（二）全く裝飾として用ひられた

（三）其面に文樣を彫刻した

ことである。いふ迄もなくこれは普通の餘り重要でない建物にはしないので、特に裝飾を必要とする樣な場合にした新しい試みであるらしい。當代はすべて建築を立派に飾つたので、遂に夫れがこんな所にまで及んだのである。

（一）及び（二）の實例は、京都市下河原町高臺寺の靈屋にある。上の方のは外のも內のも横に桐の金具を打つてある。何れも甚だ美事なものである。內外陣の境に使用してあるものは、第一八二・一八三圖の如く、下のはたゞほんの裝飾で、孔は地覆の上端にあいてゐる。上のも殆んど大部分幣軸の下端に孔があり、極く僅かが蕖座の內側にかゝつてゐる。上の場合に、もう少し內に孔があれば下のと同じくあつてもなくてもいゝことになるのである。だから上のは、例へ僅かにせよ役にたつてゐるからいゝが、下のこそ何のためにつけたのか、まるで實用になつてゐないから、全くの飾りものとするより仕方がない。上に丈けつけて、下になくては物足りない、といふ樣なところから、多分つけたのであらう。正面外側のも全くこれと同じ調子である。上のは後補、下のは古い。

第一八二圖に於いて、軸承の孔は幣軸の弧狀をなした部分にあいてゐるので、金色堂の場合の樣に弧狀をなせる部分を其まゝにしておいては工合が惡いので、其部分、卽ち蕖座をつける部分と孔を穿つ部分とを平たく四角にしてある。かうすれば孔も自由にあくし、蕖座も都合よく横から取つけ得るのである。これを第一七五圖の凸起と比べてみると、甚だ興味があるであらう。

（三）の例は澤山あるかも知れぬが、私は一つほか知らない、夫れは官幣大社筥崎宮樓門のである私は第十二卷第二號第七一頁に其扉の圖を掲げ、同第七九頁下段中頃に、その「下端に唐草をつけた入念のもの」があるとかいたが、第一八四圖に示したのはこれである。

圖に於いて、向て左の方に若葉が彫刻してあるところは、此の時代の墓股そつくりである（第二四圖）。右の方は、左の方と同にしては、柱につかへるため、如何にも能がなさ過ぎてきがきかぬ。そこで全然形をかへ、圖の如くして本柱に取りつかせ、其下端には模樣化した鳥（千鳥の樣な形の鳥）を刻みつけたゝめ、先人未發の獨創的なものになつた。

第一八五圖は、扉の中央召合せの上に、打つてある止木である。先に東福寺のところでは、扉を閉めたまゝではづす事ができぬためとかいたが、此の扉は大きくて中に閉めたまゝどうすることもできない、だから止木はなくともいゝのであるが、多分たゞ飾りにつけたのであらう。其足元の形は墓股式としていゝ樣であるが、途中からでゝゐる若葉は當代虹梁袖切のところの夫れと全く同一である。これは第十二圖左下又は第二七圖右下等にでゝゐる虹梁の唐草と比べてみれば直に解ることである。中央につけてある先の尖つてゐるものは多分寶珠であらう、寶珠は鎌倉以來いろ〳〵なところによく用ひられており、室町では鬼瓦の眉間についてゐるし、花瓦の中心飾として可なり用ひられた、だから止木の中心飾として出てきても少しも不思議はないのである。とにかくこれは珍らしい例である。

故につめると次の樣になる

大體の形は前代同樣であるが、其面に飾金具を打つたのがあつた。また全く裝飾のために外から打ちつけてある丈けで、軸承としては何等

の用をなしてゐぬのもあつた。稀に其面に文樣を彫刻したのもあつた。

のである。いふ迄もなく、當代は彫刻充塡式が流行したから、下端に文樣を刻するなども其結果とみることができやう。だけれど、こんなのは手をかけた割に效果がない樣である、其せいか餘りはやらなかつたと見え、實例は少ない。次の

江戸時代

になつても、前代より繼承した型が一番多いが、

(一) 全體を裝飾金具で包んだもの

(二) 普通の型で背の高いもの

(三) 特殊型式のもの

等が目立つのである。

第一八六圖は、大阪の天王寺用明殿の拜殿正面出入口ので、時代が新しい丈け形はまづいのは止むを得ぬ。一方の扉が三つに折れて、其軸がこの蕊座に入つてゐる、卽ち「三折兩開棧唐戸」の例である(前號第一五三頁上段より下段へかけて參照)

第一八七圖は日光東照宮經藏ので、地覆長押は柱のところで止り、其次には圖の樣な全部金具で包んだ蕊座がある。側面のは無地だが、上端のは一面に幾何模樣をほつてある。これ卽ち(一)の實例である。

若しこの長押が柱で止らずにずつと通り、蕊座の代りに長押上端に、丁度この上端の飾金具を打つたとする、さうすると夫れは東照宮拜殿・石の間、及同大猷院靈廟本殿出入口等の扉の下方の軸承になる。『建築字彙』の「扉の軸をうけしむるため地覆等にとりつけたる金物」といふ蕊座の定義に全く一致してゐるので、卽ちほんとうの蕊座金物である。鎌倉以降、大多數には何れもこの定義がうまく當篏らなかつたが、反て時代が降つてから屈指の建物にこんなのが多くあるのは面白い事である。

(二)の例は第一八八圖、山城宇治黄檗山萬福寺三門ので、高さは一尺以上もある。これは「蹴放」の背が高いから自然かうなつたのであらうが、この寺の諸堂のは大概背が高い、だから型は普通のと大分變つて見える。

次は(三)の特殊型式のであるが、このうちには先に記した瓜型・氣胞型・巽型・歪型等を皆含ましておいたのである。以下この順序で記述する。

(イ)　瓜型。實は名のつけ樣がないのでかうしておいたが、先づへチマの樣な形といつた方がよさゝうである。併し糸瓜(へちま)型では餘り通俗すぎるから、たゞ瓜型としたのである。第一八九・一九〇の二圖をみれば、別に說明をしなくとも、其名の由來は判るであらう。黄檗宗の建物では、前號にかいた通り、出入口の扉の外へ半扉を吊り、前者は内へ後者は外へ開く樣にしてある。だから前者の蘂座は大概堂の内側にある。これ等は型が變つてゐて甚だ面白いのである。

(ロ)　氣胞型。此れも亦、前のと同じく困つてこんな名にしたのであるが、どうも拙いのでもつといゝのを考へてゐる。これは瓜型より一層の珍型で、先づざつと魚のうき袋の樣なものである。瓜型との差は途中に一つくびれがある丈けだが、夫れで大分に變つて見えるのである。

次に記す三つの實例は何れも福濟寺にあるのであるが、第一九一圖と第一九三圖とは、其形も全體が赤く塗つてあるのも、よく似てゐる。併しながら前者に於いては、下端に近くつけてある鋸齒紋の間の凹所には、所々に金箔が殘つてゐるから多分元はこゝ丈け箔置になつてゐて、さぞ綺麗であつたらうと思はれる。後者の方はそんなことはないが、括れの下は尖端を有する蓮花紋より成つており、上の方は瓜型と同じく縱線がある。

第一九二圖は第一九一圖の下の方ので、これは

括れの間に帶はないが、一面に雲紋を薄肉にほつてある。何れもこの二つは外側につけてあるせいもあらうが、下のは大分にいたんでゐて、一方は後補だから、圖に示したの丈けが當初のものと思はれるが、雲紋の殘つてゐるところは僅かで、大部分はくされてとれてしまつた、いづれ其うち全面腐朽して了ふのであらうが、他に例がないのであるから、今のうちにうつしでも造つておいたらばどうかと思ふ。但し實のところ下の蕚座に雲紋は餘り適當ではない樣である。上の方のをこんな風にして、下のは瓜型にした方がよくはないであらうか。

（八）異型。崇福寺第一峰門にある（第一九四圖）樣なのを指したので、隨分變つた形であるが、面白味もうま味もない、たゞこんなエタイの判らぬ形である。同寺三門のもまたこんな風であるが、これより簡單である。

日光大猷院夜叉門のも、普通のとは少し型が變つてゐるから、これも異型の中へ入れてもいゝか知れぬが、實はほんの少し變つてゐるといふだけで、大したものでない。だからこんなのはこゝで論ぜぬ方がいゝのかも知れない。

（二）歪型。歪型とは中心線に對して左右相稱でないものゝ稱呼である。さうすると第一八四圖等も當然このうちに入れべきであるが、あれは柱につかへるから、あゝでもせねば至極平凡なものになつて了ふだらう、故にあれは特別扱にして、この中へ入れないでもよからう。

第一九五圖に於いて、半扉の幅さへもう少し廣くすれば、こんな形にしないでも、左右同じものにできるし、夫れが都合が惡ければ多くの場合の樣に蝶番さへ用ひれば樂に吊れるのに、さうしないでこんなものにしてある。これは恐らく天下一品であらう。今迄掲げた蕚座のうち一番拙い形である。

＊　＊　＊　＊　＊

以上で一通り木製蕚座の種類を盡したと思ふから、次は唐居敷に移ることにする。（昭和二年十二月一日稿了・木曜・晴）